

平成 30 年度 第 2 回 静岡市立登呂博物館協議会会議録

- 1 日 時 平成 30 年 9 月 12 (水) 10 時から正午まで
- 2 場 所 静岡市立登呂博物館 1 階 登呂交流ホール
- 3 出席者 (協議会委員)
石川 宏之 会長、伏見 和久 委員、杉山 昌之 委員、
海野 美枝 委員、藤田 三佐子委員、渋江 かさね委員、
杉山 美代子委員、石亀 雅敏 委員、
(事務局)
文化財課 (登呂博物館)
宮本担当課長兼館長、芝原主幹、益田主査、小島主任主事、
鈴木主任主事、國島主任主事、桑山主任主事
- 4 傍聴者 0 人
- 5 議事記録
1 登呂博物館長挨拶
2 博物館施設視察
3 議事
(1) 平成 30 年度上半期の事業報告について
(2) 平成 31 年度の事業方針について
(3) 議題「子ども世代への、登呂、考古学、文化の魅力を
継承するための、登呂博物館における課題の解決策に
ついて」

事務局

本日はお忙しい中、貴重なお時間をいただきまして誠にありがとうございます。それでは定刻となりましたので、ただ今より平成 30 年度 第 2 回静岡市立登呂博物館協議会を開催させていただきます。

なお、本日の会議は、委員定数 10 名のところ、8 名の皆様に御出席いただいておりますので、会議は成立いたします。

また、本会議は市民の皆様に公開することになっておりますが、傍聴希望の方はいらっしゃいません。

本日私が会の進行を務めさせていただきます。登呂博物館の芝原と申します。よろしくお願いたします。それでは、開催にあたりまして、宮本登呂博物館長より御挨拶を申し上げます。

1 登呂博物館長挨拶

館長

登呂博物館長の宮本です。委員の皆様におかれましては、お忙しい中御出席いただきありがとうございます。開会にあたり一言御挨拶申し上げます。

本日は、今年2回目の協議会となります。今年度の1回目として6月28日に開催いたしました。その後、企画展「富士山がみえる」を公開し、夏休み期間に小中学生や親子連れに向けた行事を開催しております。

今年は例年になく猛暑に見舞われ、遺跡への来場者数にも影響があったと感じております。また、8月末に総務課から「行財政改革推進審議会の中のテーマとして選ばれた」という連絡がありました。内容としては、市長のオーダーにより、芹沢銈介美術館を含めた登呂エリアを歴史文化遺産としてどう活用できるかということで審議会を3回ほど開いて、来年市長に答申するという事です。おそらくこれから資料を作って審議会委員の方から御意見をいただく形になるかと思っております。

本日は議題として、この博物館の課題について後ほど委員の皆様から御意見をいただきたいと考えております。いただきました御意見については博物館の発展に繋がるよう生かしていきたいと考えておりますので、後ほど活発な議論をお願いします。

これにて開会の挨拶に代えさせていただきます。

2 博物館施設視察

事務局（芝原）

議事に先立ちまして、恒例になっております登呂博物館の施設について視察を行いたいと思います。今回は、博物館の表に出てこない運営に関わる施設、バックヤードについて皆様に御覧いただきたいと思います。具体的には、ボランティア室、書庫、荷解室、研究室、収蔵庫などです。直接的には来館者の目に触れないところですが、博物館の運営には無くてはならない施設ですので、ぜひ御覧いただきたいと思います。

—館長、桑山主任主事の先導で各委員視察へ—

事務局（芝原）

引き続き、次第に沿って進めて参りますが、先に配布資料の確認をさせていただきます。静岡市立登呂博物館協議会の委員名簿、座席表、次第、資料、平成30年度登呂博物館の組織図、登呂博物館のパンフレット、2018～2019年の年間スケジュール、夏の教育普及活動をテーマにしたチラシ、今後開催される企画展「平成×登呂」のチラシ、平成30年度第1

回の議事録、これは署名前ですが、前回の振り返りという意味でお配りしております。それと、前回、前々回の内容を抜粋した「子ども世代への、登呂、考古学、文化の魅力を継承するための、登呂博物館における課題の解決策について」についてまとめた資料、以上です。それでは、ここから議事に入りたいと存じます。静岡市博物館条例第 12 条 4 項により石川会長に進行をお願いいたします。

3 議事

石川会長

これより議事の司会進行をさせていただきますのでよろしくお願いいたします。

議事の開始にあたり、本日の協議会は議事録についても公開することになっており、公開にあたり内容について会長や委員が確認して署名することとなっております。今回、署名者として私の他にもう 1 人、海野委員にお願いできますか。

海野委員

(了承)

(1) 平成 30 年度上半期の事業報告について

石川会長

平成 30 年度上半期の事業報告について、事務局から説明をお願いいたします。

館長

平成 30 年度上半期の事業報告をいたします。お手元の資料の 6 ページを御覧ください。6 ページの上の部分が入館者状況です。4 月から 8 月までの入館者は、昨年度 92,789 人でしたが、今年度は 90,215 人と 3%ほど減っております。月ごとに見ると、4 月、5 月は前年度より多かったのですが、6、7、8 月で減少してしまっているというのが現状です。

次に資料の 13 ページを御覧ください。平成 30 年度の事業実施状況で展示についてです。

まず、前年度に引き続き、6 月まで企画展Ⅰ「ウトウ・トロ・タカノミチ」を開催し、その次に企画展Ⅱ「富士山がみえる」を開催しました。これは 6 月 30 日から 9 月 9 日までで、ちょうど先週の日曜日に終わったところです。

次に資料 14 ページを御覧ください。講座・イベントについてです。No.6 企画展関連講演会「富士山信仰とそれ以前」から No.10 とろむら体験フェスティバルまでが前回の協議会以降に実施した行事です。内容としては、特に 8 月の夏休み期間については、親子連れ、小中学生の来館を意識して企画しました。

次に、資料 16 ページ共催・連携事業については、No.3 「妄想竪穴住居の設計」からNo.6 登呂カルタ・すごろくまでが前回の協議会以降に実施した事業です。「妄想竪穴住居の設計」については静岡デザイン専門学校、登呂遺跡の田んぼで生物観察については常葉大学の協力を得て事業を行いました。

その他、17 ページに博物館実習の受入とありますが、夏休み期間に学芸員を目指す大学生を9人受け入れて実習をしました。

平成30年度上半期の事業については以上です。

石川会長

皆様から御意見、御質問等があれば挙手をお願いします。

では私から、14 ページのとろむら体験フェスティバルでは、延べ1,681人という多くの方が参加されていますが、これは周辺の自治会、町内会なども協賛しているのか、それとも職員の方だけで独自でやっているのか教えてください。

館長

職員を中心にボランティアの方にも協力していただいております。位置づけが、博物館だけではなく遺跡全体を使って展示会のような形で色々な体験学習を一度にできるという企画です。スタンプラリーもやっていて、それぞれを回ってスタンプが集まったらシールなどを差し上げています。

また、普段やっていない体験として、遺跡の中のため池を使って丸木舟に乗舟する体験などもあり、マスコミの方にも取材をしていただいております。

石川会長

改めて素晴らしいと思います。

渋江委員

14 ページの講座・イベントのことでひとつ教えていただきたいのですが、例えば学芸員養成講座ですと対象が小学5年～中学3年ですが、この対象の方々に届くような広報としてはどのようなことをされていますか。素敵なチラシを作られていますが、どこを通じてどこに撒いているのか、またSNSを使っているとか、なかなか無い企画なのでどんな風に伝えているのかお聞きしたいです。

館長・事務局（國島）

ホームページ、報道資料、あとは周辺の小中学校にチラシを配っています。

事務局（芝原）

皆さんのお手元にチラシがあるかと思いますが、この中にも子ども学芸員養成講座の案内が載っております。このようなチラシを、できるだけ多くの関心を持ってくださる方の目に留まればということで市内の各生涯学習交流館、類似する博物館施設、動物園などに配っています。このチラシに載っている写真は、先ほどのとろむら体験フェスティバルのひとコマや、日頃の体験学習の有り様を示しているのです、そういうところから興味を持っていただき、参加していただける機会にできたのではないかと考えています。

館長

子ども学芸員養成講座については、10名募集のところ6名の参加で少ない印象ですが、全3回の講座で、実際に土器の拓本を取ったり、展示を考えたりといった踏み込んだ内容になっておりますので、参加者数ではなく内容として、子どもに遺跡の中で実際に体験してもらおうという中身の濃い講座になったのではないかと考えています。

石亀委員

今日は貴重な資料、皆さんが入れないような所まで見せていただき、委員の役得と嬉しく拝見させていただきました。ありがとうございました。

13 ページNo.5企画展Ⅴ「静岡市の旧石器・縄文時代」の開催については、既に何かの資料で拝見して、3月23日からの展示を楽しみにしています。

ひとつお尋ねしますが、旧石器、縄文時代の遺跡、遺物は現実にここにあるのですか。

事務局（鈴木）

登呂博物館にはありませんが、静岡市としては縄文時代の遺跡も市内にありますので、それを展示します。縄文時代のものは全体としても少ないので、もう少し遠く、富士や沼津などには遺跡も多くありますので、そちらも含めて展示したいと考えています。

石亀委員

旧石器、縄文、弥生、古墳時代の文化の流れ、人々が使った色々な器物の変化、時代ごとの出土品の移り変わり、時期によってどのような特徴が出てきたのか、また、材質、作り方はどのように変わってきたかということを含めて、観覧者にわかるように企画を作ってくださいと、より観覧者の興味を引くのではないかと、またそういう広報をすることによって、登

呂博物館に人々が足を運ぶのではないかと感じています。

この間の「ウトウ・トロ・タカノミチ」は、非常に展示スペースが少なく残念に思いましたが、せっかく大事なものを他から取り寄せて展示されるということですから、できれば、この期間はスペースをしっかりと取っていただき、古代の流れを知りたいと感じているのでよろしくをお願いします。

(2) 平成 31 年度の事業方針について

石川会長

続きまして平成 31 年度の事業について事務局から説明をお願いします。

館長

平成 31 年度の事業について、資料 24 ページを御覧ください。

項目 1 (1) に来年度の企画展の計画を示しており、それぞれの趣旨を表にしています。企画展Ⅰは地域の遺跡・歴史文化を学ぶ、企画展Ⅱは「登呂に繋がること（登呂つながり）」を見る、企画展Ⅲは登呂を中心とした考古学（研究成果）の紹介、企画展Ⅳは幅広いテーマで考古学以外も可ということそれぞれ計画しております。

具体的には(2)に記載しております。

まず、最初は「静岡市の旧石器・縄文時代」という展示です。この展示の趣旨は、過去に登呂博物館で「静岡平野の弥生時代」、「静岡平野の古墳時代」という展示を行ってから 30 年経って新たに遺跡が見つかったのでその成果を紹介するというものです。

次に「芹沢銈介の目」という企画を考えています。隣接する芹沢銈介美術館にある芹沢銈介が蒐集した多くの資料について、考古資料から見える「美しさ」、芹沢銈介の審美眼、考古資料が芹沢に与えた影響を探るといったものです。

次に「Fire」という企画を考えています。全国各地で行われている「まいぎり式」の火起こしは登呂遺跡から全国に広まったと言われていますが、この登呂遺跡に少なからず縁のある「火」について、照明器具など火に関する考古・民俗資料を集めた展示を行います。

次に「賤機山古墳展」です。賤機山古墳は東海地方でも有数の規模を誇る古墳ですが、ちょうど同時期に富士市の富士山かぐや姫ミュージアムでも同様の古墳の展示を行う予定があり、共同開催など連携した企画を視野に準備を進めたいと思います。

最後に「静岡市の弥生時代」です。これは静岡市の遺跡を紹介するシリーズ展示の第 2 弾で、以前の考古学の成果をさらに積み重ねるといった趣旨で考えています。

以上が平成 31 年度の企画展についての説明になります。

続いて遺跡活用事業について、資料 26 ページを御覧ください。

まず（１）は、市民水田事業で、公募市民による田植えから収穫までの稲作体験です。

（２）は、登呂遺跡復元水田活用事業で、幼稚園児等による米づくり体験です。（３）田植え・田下駄体験は、登呂遺跡の中で一般市民の方に田植え体験と田下駄体験をしていただきます。（４）稲刈り体験は、水田の中で石包丁や剥片石器を使用した穂首刈りによる稲刈り体験を実施します。（５）登呂遺跡の田んぼで生物観察は、登呂遺跡の水田を使った生物観察です。

次に教育普及事業です。概要としては今年とほぼ同じような内容ですが、自由研究お助け隊、子ども学芸員養成講座、その他の事業を計画しております。

最後に重要文化財出土品保存修理事業ですが、今年から始まり 10 年計画で収蔵品の修理を計画しております。平成 31 年度は約 40 点の処理を行う予定です。

以上が平成 31 年度の事業です。

石川会長

皆様から御意見、御質問等をよろしく申し上げます。

石亀委員

平成 31 年度に計画している企画展「静岡市の弥生時代」の説明の中で、過去の展示から 30 年近く経って新たな遺跡が見つかっているとありますが、これはどこでどのような遺跡が見つかったのでしょうか。

事務局（鈴木）

確実な回答ではありませんが、30 年前に国道 1 号のバイパス、川合、瀬名、麻機辺りの下をかなり大規模に発掘しており、大きく紹介すべき点です。また、弥生時代の同じ遺跡でも所々増えたりしていますので、新しい部分を含めて、改めて弥生時代を総括的に展示したいと考えています。

杉山美委員

芹沢銈介美術館の収蔵品とのコラボのような企画（平成 31 年度実施予定の企画展「芹沢銈介の目」）をなさるとのことですが、芹沢銈介美術館は布については古い物があるので、登呂遺跡から出てきた布との材質、織り方などの比較も面白いと思っているのですが、今回は骨董品という、考古学に近いものになるのでしょうか。

事務局（鈴木）

(芹沢銈介美術館は) 土器などの考古資料を非常に多く所蔵しており、以前にも展示したことがあります。全て展示しきれていないので、芹沢銈介美術館側からのお話もあり、それを中心に行うつもりです。確かに布についていうと、登呂でも麻の布片が出土しており、芹沢は染織家なので、先方の資料を見て検討していきたいと思っています。

杉山昌委員

平成30年度、31年度と資料を見せていただき、大変魅力的な講座をたくさんやっていたと思っています。全般的なことをお話させていただくと、ひとつひとつの講座は非常に魅力的であるし、また魅力的な講座を作ろうという方向で進めていくのはとても良いことだと思いますが、一方で、ひとつひとつの「よく燃える薪」に着火する「手立て」があれば良いと思いました。一度火が点けば風を送るなど燃やす手立てはあると思います。登呂遺跡全体に対して「魅力的な講座があるので行ってみよう」というのもそうですが、登呂遺跡に魅力を感じて、そういう目で見た時に「こんな魅力的な講座がいくつもある！」とか。具体的なアイデアはありませんが、「非常によく燃える薪に着火する手立て」があったらすごく良いなと思います。

館長

私も同じようなことを感じています。先ほど今年に来館者数が減ってしまっているとお話しましたが、企画展は年4回行っており、年4回というのは準備がかなり大変です。また、色々なイベントや広報もやっていますが、さらに来館者を増やすためにもっとイベントをととか、もっと宣伝をとというのはあまり現実的ではないと思います。これ以上量的に増やすのは困難ですので、そうすると広報の方法を考える、例えば、近隣の学校へチラシを撒くことを強化するとか、ポイントを変えるということ、ポイントを探してそれに従ってやっていって、全体的に来てくれる人が増えるという流れを考えたいと思います。

貴重な御意見をありがとうございます。

杉山昌委員

広報なども色々工夫してやっているとありますが、先ほどの例で言うと「火をもっと燃やすための風になる部分」なのかなと思います。登呂遺跡自体に魅力を感じるというような、いわゆる「着火材」に値するようなものが何か無いか、前回も言いましたが、テレビ番組などが登呂のムラに来たりすると、突然魅力を感じて、目が変わり、そうすると講座に対する広報を見る目が変わったりすると思います。そういった「着火する手立て」が何かあると広報が生きてくるかなと思いました。

石川会長

続いて伏見委員、学校教育の視点からぜひ御意見を申し上げます。

伏見委員

子どもがどういう目で、こういう所に来るかということから考えていくと、きっと「弥生の人って大したことがないだろうな」と思って来ると思います。どういう遺跡へ行っても何時代であっても、「きっと現代の方が優れているだろうという」目で来ると思いますが、来ると「えっ！」というのがいっぱいある訳です。

この間、東京の国立博物館へ行って縄文時代の展示を見てきましたが、その時に感じたのが、縄文時代、弥生時代の「ヒト」は生きていないが、「モノ」を通して「ヒト」を想像することができるということです。こういう生き方をしていたのか、こういうものを好んでいたのか、女性の化粧道具やそういうものが出てくると人間ってというのは変わってないなと気づく訳です。

そういった「ガーン！」とくるものが展示の中にあると、きっと見る目が変わってくるだろうと思いました。

ここにも色々な企画があるので、目玉とはちょっと違う「ガーン!」、「あっ!」というのがあると、子どももそういう目で見始めるし、来る人もそういう感情を持ってくれるし、また来たいなという気持ちを持つのではないかと思います。

自分の息子が小学生の時、学校で登呂遺跡に見学に来ましたが、その1週間後にもう1度私の運転でここに連れてきたことがあります。学校で来るとどうしてもグループで回るの、見逃したもの、気になったものがあったようで、「あれが見たい、もうちょっと調べてみたい」と言い出したからです。子どもがどう感じるか、来る人の目線で物事を見てみるとヒントが転がっているのではないかと思います。

石川会長

私から感想と意見ですが、私は遺跡活用事業の方にすごく興味があって、今日も早めに来てどんな稲が育っているか見てみました。子どもの目線からすると、建物の中の展示よりも、屋外で実際に育てられている稲などがリアルでわかるような看板、簡単なサイン、そういうものがあつた方が季節感も感じられるし、来た時にまた新たな発見があつて良いと思います。

来館者を増やすために常設展・企画展に重きを置くだけでなく、リピーターを増やすために、今までされている遺跡活用事業の方に力を入れていった方が、子どもたちにとっても良いと思いました。

また、常葉大学と連携した「田んぼで生物観察」などは、直接弥生とは関係ないかもしれませんが、ここには昔こういう人たちが住んでいた、というようなきっかけ作りになって、さらに上の学年になると関心を持っていく、先ほどの（杉山委員の意見）「どう火をつけるか」というのは、どう結び付けてリピーターにしていくか、という仕組みのことに気もします。特に子ども達はそうだと思います。

良かったのは、市内の幼稚園児による米づくり体験ですが、看板も立ててあって、「自分達が育てた」という写真が記念に残っていると、小学生になって訪れるきっかけになるかもしれない、そんな良い循環をつくれる要素がたくさんあると感じました。

石亀委員

幼稚園に通っている孫が稲づくりをさせてもらいましたが、孫から話を聞くと、子ども達の行く所に親も付いて行き、実際に力を出しているのは親達だということです。子どもを呼ぶと、祖父母、親達が来る、この間の中田小学校の夏祭り（1,200人～1,500人規模）もそうでしたが、子どもが来るから祖父母も親も皆一緒に参加する、子どもを使ってそのような広がりも利用できるのではないかと考えています。先ほど杉山（昌）委員がお話されたように、一番大事なことは「火をつける」ということ、これは私も仰るとおりだと思います。

館長、職員の方々は登呂博物館として一生懸命やっていますが、我々住民として考えてみると、登呂公園としての魅力を出すことよって、自然に博物館に入る人も増えていくと思っています。登呂公園を魅力的な公園にして、お父さん、お母さん、おじいちゃん、おばあちゃん達が集まる場所にしていくことよって、登呂博物館の認識がもっともっと高まってくると思います。こういう取り組みをぜひやっていただきたいです。

広大な土地があってもまだまだ有効利用されていない、川があって蛍が飛んでというようなことも含めて、登呂公園を地域のお母さん方、高齢者たちが集まる場所にするこよって博物館がもっと生きてくると感じています。

また、先日、ブラジルの博物館の火災で9割が焼失したと世界的なニュースになりましたが、そういう問題については登呂博物館ではどのような対策をされているのですか。

館長

ブラジルは職員不在の夜間に失火等で火事になったかと思いますが、当館は夜間の自動消火設備を備えております。スプリンクラーを使うと収蔵品が傷んでしまいますので、収蔵庫などはガスによる消火をする仕組みになっており、毎日スイッチを入れて使える状態にあります。

石亀委員

先ほど見せていただいた収蔵庫の中に、フィルムで古い資料が管理されていました。フィルムは劣化して使えなくなるのでDVDなどへ転写して保存するというのが昨今宣伝されていますし、少しずつ進めているとのことでしたが。

館長

ファイルとしての保存とデジタル化での保存があります。

なかなか収蔵品の整理に手が回らないところではありますが、来年度から博物館のコンピュータシステムを入れ替えて、将来的にはデジタル化の保存にも対応しやすいようなシステムに切り替える予定です。

石亀委員

コンピュータで保存すると、資料を取り出す時にすぐに出てくるということですか。

館長

台帳は紙ベースであります。将来的にコンピュータ上でデータベースにして、修復の記録なども含めて取り出せるようなシステムに切り替える予定です。

藤田委員

遺跡の活用事業として、幼稚園等による水田の活用はすごく良いなと思っています。

遺跡、文化財というと敷居が高く、なかなか踏み込めない気がしますが、学校の見学で来て「こういうところなんだ」と知る以前の幼稚園児などは、敷居が高い低い関係なく、「来たら遊べる」という感覚があると思うので、遺跡が見える中で、水田に足をを入れて稲を植えたりそういった経験をすることで、「ここはこういうところなんだ」、「小学校に入ったら見学もできるんだ」、「また行ってみたい」という気持ちが芽生えてくるのではないかと思います。

前にテレビで、(登呂遺跡の)住居か何かのデザインのイベントをやっていて、それを見たときに「こんなイベントをしても良いんだ!」と思いましたが、そういうところも、少し敷居が下がったような感じがして、市民として気軽に行けるところなのかなという思いがしました。

Wikipediaで「登呂遺跡とは」と調べると、堅苦しい文章が出てきたので、他に何か無いかと調べると、女性会館(アイセル)のWebサイトの中で、登呂遺跡についてわかりやすく説明しているところがありました。こちらのボランティアガイドさんの書き込みだったの

ですが、「知ってびっくり 登呂遺跡はすごい！」というタイトルで、自分が見たベスト 5 の登呂遺跡を紹介しますといった内容でした。「登呂人がグルメだった」とか、「工夫した住居づくり」とか、「古代ロマンの祭殿」とか、ポイントごとにわかりやすく書き込みがしてありました。

固い表現だと地味な感じもしますが、とても柔らかい文章でわかりやすく書いてあって「行ってみたいな」という気持ちになりましたので、柔らかい語りかけの表現も良いなと思いました。

館長

登呂遺跡で虫取りをしたり、どんぐりの実を拾ったりすることを目的に訪れる小学校や保育園もたくさんあります。市内でもこれだけ身近に蛙がいて、どんぐり拾いが出来てという場所は他に無いと思いますが、その辺りがあまり知られておらず、そういう場所としても認識されたら良いなと思います。

また、Web サイトの中で「こういうところが面白かった」という書き込みなどは大切だと思っています。現在のWeb サイトは堅苦しいところがありますので、今後替える時には、さらに使いやすく、登呂遺跡に来たくなるようなWeb サイトに替えていきたいと考えています。

海野委員

前回の議事録 11 ページに「音声ガイドが導入された」という記載があります。

静岡市内で、アジアからの研修生を受け入れている企業の方から、「研修生が休みの日に引き籠もってしまうので、社員がガイド役になって、多い時は 20 人ほどの研修生を市内のイベントなどに連れて行っている」という話を数社聞いたことがあります。そのガイド役の社員の方が、どこに連れて行ったら良いか困っているとのことでしたので、音声ガイドが導入されたことは商工会議所、企業宛にお知らせしたいと思いました。(研修生たちが) 国に帰った後も登呂のことが思い出に残っていると素敵だと思います。

次に、31 年度の事業に関して思いつくままにお話させていただきます。企画展「芹沢銈介の目」について、クリエイターやデザイナーの方々などは、このような視点での展示に興味を持つ方が多いのではないかと思います。自分へのインプットを常にしていくことを課題に持った方々なので、そういう方々に届けたい企画だと感じました。

また、暮らしぶりに意識が高い方、わかりやすい例を挙げると「婦人画報の読者のような方々」がグループで見に来られるというイメージが湧きます。その時に、先ほどの女性会館(アイセル)の書き込み「登呂人がグルメだった」とか、「古代の暮らしぶりはこうだった」

というところと結びつくと、その方々の好奇心を満足させられる内容になるのではないかと感じました。

企画展ウ（仮題 Fire）については、火が題材ということで、子ども向けに例えば「縄文火祭り」のようなことを遺跡活用事業と結びつけて行うという切り口があっても良いのかなと思います。昔から引き継がれている祝いや祈りの祭りなどを現代風にアレンジした、子ども向けの演劇、ダンスなどのようなものがあれば、子どもたちにとってはそれがきっかけになる可能性もあると思います。

企画展ウに限らず全般的に、「子ども世代への、登呂、考古学、文化の魅力を継承するための、登呂博物館における課題の解決策」という意味では、活用事業の部分になりますが、子どもたちが、博物館ではなくて公園でのボトムの体験をたくさんして、それをリピートすることで、自分が見に来るお客様ではなく主体となっていく、そうすると遺跡の学びの方に繋がっていく可能性が高いのではないかと思います。

（気がついた点は以上ですが、改めて資料を見ると）広報の量はすごいなと思います。

館長

広報は1回だけではなく、企画展が始まる前、最中、終了前というようになるべく手厚くするようにしています。

海野委員

広報に関してありとあらゆるできることを徹底的に、地元のメディア、イベントなど隙を作らないほどよくやられていると思います。その上で、私が今申し上げたことが現実的かどうかを考えた時に少し難しい気がしました。協議会委員ではなく、何か核になるグループまたはチームを立ち上げていくこと、さらに予算をかけないでどう立ち上げるか、例えばボランティア、大学の研究などを絡めて立ち上げるなどを考えていかなければ、職員の方々だけではこれ以上は無理ではないかと感じます。

（3）議題「子ども世代への、登呂、考古学、文化の魅力を継承するための、登呂博物館における課題の解決策について」

石川会長

それでは、今回の議題である「子ども世代への、登呂、考古学、文化の魅力を継承するための、登呂博物館における課題の解決策」ということで、前回までの議事録をお渡ししておりますが、もう一度改めて今回話す内容について説明をお願いします。

館長

「静岡市立登呂博物館博物館協議会 議題」というタイトルの資料を御覧ください。

こちらは前回までに出していただいた御意見を列記したものです。それらをまとめていくために追加の御意見などがあれば寄せていただきたいと思います。

石川会長

資料2 ページ目【理想】の項目の下に「A B C D」といった循環のモデルを提示していただいておりますが、その辺りをもう少し説明してください。

事務局（益田）

説明させていただきます。資料の【理想】という項目の一番下に「A B C D」と記載しておりますが、これは、皆様からいただいた御意見、登呂博物館の印象などをまとめて循環のかたちを表したものです。A B C Dが循環してぐるぐる回っていくことで、最終的にリピーターが増え、登呂遺跡、登呂博物館、考古学、文化などが伝わって継承されていくことに繋がるのではないかという考え方です。

まず「A」登呂遺跡、登呂博物館に会場していただく、これが一番初めだと考えました。見学、体験をしていただいて来館者増に繋げるということです。次に、見学、体験をして、登呂遺跡の価値を知っていただき、遺跡の雰囲気、公園の雰囲気を気に入っていただく、それが二番目「B」だと考えました。更にそこで得た物（感動、知識）を誰かに伝えていただく「C」、身近な方でも構いませんし、SNSなどで発信していただくことも良いのではないかと考えています。そして得た物（感動、知識など）を長く心に留めて、何年、何十年経っても登呂遺跡に行ったことを覚えておいていただくことで、（感動、知識などを）伝え続けていただく、そして再度訪れていただく「D」、その時には新しい来館者を連れてきていただけると良いということです。そして新たに訪れた方はまた「A」から始まり、それが循環する事でリピーターとなり、文化の継承をしていただく方になっていくのではないかと考えました。

石川会長

リピーターを増やすことによって、新規で訪れる方とリピーターを合わせて、最終的には来館者が増えていくという良い循環を作り上げていくモデルを提示していただきました。ありがとうございます。

登呂博物館の現状や印象、今後の方針、課題、それを具体的にどう事業に結び付けていくかという具体策についてそれぞれまとめていただきましたが、それらを含めて御意見、御質

間等がありましたらよろしくお願いします。

石亀委員

私個人的に、当時の人は縄文、弥生時代の土器をどのように作ったのか、現在は焼き窯を作って焼いていますが当時はどうしたのか、などの疑問が常々頭の中にあります。

(資料を見ると) 例えば矢じり(弓矢)、火起こしなどの体験は常に行っているようですが、本来一番大事な資料である土器づくりについては、ほとんど私たちの目に見えておらず、「土器をどう作ったか」についてあまり知らされていません。例えば、カラー写真などを使って「当時の人たちはこのような順番で土器を作った」という流れがわかるものを作っただけ、回覧版の中に入れるというような広報の仕方があっても良いのかなと思います。

もう1点、当時の赤米、黒米というものが2,000年を経て発芽したということですが、これはどういう技術で発芽したのか個人的に知りたいのですが。他にも植物の種子などがあってそういうものも芽を出したのでしょうか。

館長

土器づくりについては、年間の中で体験の講座をやっていますが、皆さんに十分に知られていないのかなと思いますので、さらに広報して周知するなど工夫する余地があると思っています。

事務局(桑山)

赤米と黒米について、2,000年の時を経てと言いましたが、博物館で発掘されているものはすべて炭化しておりますので、基本的に育つということはありません。また、当時のものは、ほぼすべて炭化しDNAが壊れているので、当時登呂で育てられていたものが赤米だったのか、白米だったのか、黒米だったのかわかっておりません。米の形などで、陸稲、水稲の混在や、品種の違うものがある程度混在していたというところまではわかっていますが、調べるのが難しいというのが現状です。

また、どこの遺跡でも赤米というのは系統的に古いものだという理解があり、どこでも「古代米」という言い方をしているのが実際のところだと思います。登呂では「焼津」という改良種の赤米と、「種子島」という赤米をいただいておりますので、系統的には古いものですが、確実に弥生時代と同じと言えるかどうかというところ難しいところです。

石川会長

議題から少し外れてしまったので修正します。

「子ども世代への、登呂、考古学、文化の魅力を継承するためにどうすれば良いのか」について御意見ををお願いします。

杉山美委員

博物館というより遺跡の方ですが、草刈をかなり頻繁にさせていただいていますが、もっと地域の子どもにも参加してもらうような方法を考えたらどうかと思います。例えば、前回の帰りに田んぼの中を通りましたが、ジャンボタニシの卵がたくさんありましたので、子どもたちに、「外来種撲滅作戦に参加して!」、「田植えの前にやるよ!」などと呼びかけて来てもらうとか。市民に開放している区画で子どもたちが田植えをしたら、刈り取りも楽しみに来ると思います。そういう体験を通して子どもたちが登呂遺跡に親しみを持てるようになると、田んぼもきれいになるし、楽しみにもなると思います。夏休みはザリガニ取りなどにも子どもたちが来ていますし。

また、水を調整して全く流していない区域がありますが、子どもたちが探す楽しみである「生物」がいなくなってしまうような気がします。いつでも子どもたちが川で遊んだり、そういう体験を通して遺跡全体に興味を持ち、親しみを持つことに繋げていったらどうかと考えています。草刈はボランティアの方がされているのですか。

館長

草刈機を使わないとなかなか追いつかないこともあり、シルバー人材センターにお願いしていることが多いです。

石川会長

渋江委員、教育面からのアドバイス、提案などがありましたらお願いします。

渋江委員

皆さんのお話を聞いていて、遺跡を活用していくことに対して可能性が一つあるということに改めて認識しました。

遺跡を活用してまずは親しんでもらうという経験をつくる、そこから更に「子ども世代への登呂、考古学、文化の魅力を継承」へ繋げるにはどういう道筋を描けるのか、体験すると子どもは自然と「登呂のことを継承したい」と思うものなのか、もう少し何か博物館側や地域のボランティアの方の力を借りて、或いは連携先の力を借りて、もう1ステップ何か必要なかどうなのか、と考えていました。

石川会長

渋江委員が言われたことは核心と思います。

建物の中の展示物に関しては、バックグラウンドで相当な知識がないと理解できないというところがありますが、史跡の場合は、生き物などを肌で感じて、親しみを持つことができます。その時にふと「ここはどういう場所だろう」という気づきが生まれ、「調べたい」という学びのステップが生まれる、そのステップをどう橋渡しして育てていくか、そのためのプログラム「また来て一段深く学んでいけるような仕組み」が出来上がると良いと思います。ただ、それは博物館の職員だけではマンパワー不足になってしまうので、特に史跡に関しては地域の人や農協関係などにサポートしてもらい、プラットホーム、組織を作ることによって持続的に運営することができ、ステップアップの橋渡しができるのではないかと思います。伏見委員、学校教育の観点からぜひ御意見をお願いします。

伏見委員

南部小学校は、おそらく市内で一番登呂遺跡にお世話になっている学校ではないかと思えます。子どもの目線から見ると、ここに社会見学で連れて来られると、連れて来られた子どもは勉強しに来るのでそこで終わると思います。登呂遺跡の次は賤機山などへ見学行きますし、学校の勉強はすぐに古墳時代に入ってしまうので、余韻に浸る暇があるかという点、残念ながら学校教育では無いです。これがあると学校教育がもっともっと良くなると思いますし、子どもの学びのプロセス（＝興味のプロセス）がどんどん膨らんでいきます。

「登呂がちょっと気になる」に始まり、その次は「何か調べてみたいな」、そして「登呂が好きになる、登呂を愛する」というように。そして、人は良い物を伝えようとするので、「あそこは素敵だよ」、「行くと何か嬉しいことがあるよ」と、どんどん繋がっていくものだと思います。

子どもの目線に立った時に、子どもがどんな学びをしていったら、登呂を愛してくれるのか、子どもたちにとってここは地域の広い水田がある「とっても良いところ」という感覚があると思いますので、その気持ちを忘れずに少しずつ学びの心を核心の中に入れて行くような、化学変化を起こさせるような、そんなものがあつたら子どもにとっては素敵なおところになるのではないかと思います。

テーマに、「登呂、考古学、文化の魅力」と三つ並列してありますが、全部違うものなので、どれが一番か順位をつけると、きっと考古学ではないと思います。三つ全部という点で疲れてしまうので、どれか1点「ここ」というところを決めると良いのではないかと思います。

藤田委員

子どもたちにとっては、まずは「学校で社会科見学の一貫として連れて来られる場所」という位置づけだと思います。現在高校生の子どもにも聞いてみましたが、「1回行ったからもういいかな」、「高校生は（文系の生徒は行くかもしれないが）授業に関連付かないと行かないかな」という答えが返ってきました。

調べ物をしようと思えばたくさん資料が揃っているし、現物を見ることが出来るとても良い場所なので、興味が湧けば自発的に行くと思いますが、教育の中で自分がモチベーションをあげて、「興味が引かれるところまでもっていく」そこが大事だと思っています。小学校でも中学校でも歴史の授業はあると思いますが、なかなかそこまで到達する、考古学に興味を持つ子は少ない、100人のうち何人いるかなという感じだと思います。ちょっとした体験をして、敷居が低い「楽しいところだな」という取っかかりから、ボランティアさんなどのサポートを得て少しずつ興味を持って行き、自分で「調べてみたいな」という段階を踏んでいかないと、なかなか「遊びました」→「博物館に来ます」という直結にはならないかなと思います。段階を踏む必要があるのではないかと思います。

海野委員

伏見委員のお話を聞いて、「登呂、考古学、文化の魅力」という意味では、最初に「登呂」という遺跡の部分、次は「文化」、昔の人の暮らしぶりや文化に「どうやって作ったんだろう」というような興味が湧いて、そういうことに興味を持って学んでいくのが「考古学」、そういう流れになるのかなと考えました。

その時に、子どもの興味と体験にマッチした教育プログラム作成すること、その辺りの整理も何を軸にするかですが、伏見委員が仰った軸の整理の仕方もわかりやすいのかもしれないと感じました。ではそれは誰が進めるか、という話になると、核になる牽引していくチームなどはどうしても必要かなと思います。

藤田委員

外国語（英語・中国語・韓国語）のパフレットが出来ていて素晴らしいと思いました。

これから2年後の東京オリンピックに向けて海外の方が増えていきますので、今後どんどん活用できるのではないかと思います。

また、地区イベント、例えば今年2月の県のPTA大会などでトロビーをお借りして広報活動をしましたが、すごく人気あります。トロビーは「目から入る登呂遺跡」なので、登呂に引き込むためのツールとしてどんどん活用したら良いのではないかと思います。

石亀委員

企画でも遊びでも良いので、何回来たらスタンプを押す、いくつ貯まったらお土産をもらえる、というようなこともリピーターを作るために考えてはどうでしょうか。

伏見委員

トロベアのバッチもぜひ作ってください。

石川会長

何かプログラムがあって、例えばバッチの色が変わっていく特典などがあると、学びは深まり、自分が上級になっていくことを感じられると思います。

色々な仕掛けはあると思いますが、それをどう動かすか、誰が動かすか、それは今の職員の方だけでは大変なので、協力者、支援者、組織をどう作っていくかが課題だと思います。

最後になりますが、登呂まつりはまさに地域の人たちと一緒にのお祭りですので、そういう人たちをいかに取り込んで、これから支援してもらえるようにするか、また、登呂まつりに来た人で、あまり歴史、考古に関心がない人でも一歩踏み込んで魅力を知るきっかけ作りになればと思います。

館長

せっかく足を運んでいただくので、普段見なかったものを見て、博物館を知ってもらうだけでも良いのかなと思っています。そのために館の中に足を踏み入れてもらうような動線も考えたいと思っています。

石川会長

登呂まつりの来場者は2,000人くらいですか。

事務局（小島）

去年実績で3万人です。（主催者発表）

石川会長

それも登呂遺跡に3万人来場したという実績ではないでしょうか。常設展、企画展を観た来館者のみを実績とするのではなく、（登呂まつりの来場者も）登呂の実績としてカウントすると、「社会効果、社会貢献」という観点からすると相当な効果を持っていることがわかるのではないかと思います。

その3万人をいかにリピーターに繋げていくかという先ほどの「循環の仕組み」に取り入れる仕掛けを作っていくことが一番大切と思いました。

その他御意見等なければ、今日の内容を文章にまとめていただき、それについて皆さんから再度御意見をいただき、答申という形にしたいと思います。「登呂遺跡の貴重な財産を次世代に引き継ぐための今後の登呂遺跡、登呂博物館の進む方向」について皆さんから御意見をいただき、ありがとうございました。いただいた御意見を、今後登呂博物館の運営に生かして貰えればと思います。

以上で、議事に関しては終わりとさせていただきます事務局へお返しします。

事務局（芝原）

石川会長ありがとうございました。

皆様からいただいた御意見、御提案をまとめて、最終的に次回来年度の1回目に答申案として皆様に諮るという形を取らせていただきます。

本日は色々な御意見をいただきました。遺跡を活用しなければだめというお話、或いは単に考古学、歴史といった高い敷居ではなく、もう少し門戸を広げてあらゆる角度から登呂遺跡、登呂博物館にアクセスしていただく方法を考えていかなければならないというような、身につまされる発言をいただきました。

登呂遺跡の戦後の発掘というのは昭和22年から始まった訳ですが、その時の発掘は単に考古学者だけによる発掘ではなくて、考古、農業、芸術、民俗、あるいは動物学的視点など色々なジャンルの先生方が集まって発掘をしたという経緯があります。その考え方というのは本日皆様からいただいた御提案と相通ずるものがあるのではないかと思います。色々な切り口で登呂遺跡を生かして登呂博物館をレガシーとして紹介したいという一つの流れだと思っています。そのようなことを念頭において答申案をまとめさせていただきます。

今年度の協議会はこれもちまして終了となります。来年度またよろしく願いいたします。本日はありがとうございました。

署名欄

静岡市立登呂博物館協議会

会長

委員
